
名探偵カンダダ二世（ショートストーリー）

青木弘樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名探偵カンダダ二世 ショートストーリー

【Nコード】

N4935V

【作者名】

青木弘樹

【あらすじ】

ちよっとしたブラックユーモア作品です。

登場人物

名探偵カンダダ二世…知る人ぞ知る名探偵。迷探偵ではない。

助手のビアンカ…カンダダの助手の女性。決して怪しい関係ではない。

スティーブ…殺された男。性格が悪く、いろんな人に恨まれていたらしい。

マイケル…容疑者その1。スティーブに金を貸しており、困っていた。

スミス…容疑者その2。かつてスティーブに女を取られたことがある。

アラン…容疑者その3。スティーブにそそのかされ株に手を出し大損している。

クリス…容疑者その4。スティーブの元・妻。むかし暴行を受けたことがある。

スティーブという男が殺された。調査の結果、4人の容疑者が浮かび上がり、今日はその容疑者たちに集まってもらった。

それぞれスティーブの家の近所に住んでおり、動機もある。

「はあ…。せっかく今日は私の誕生日なのにお仕事なんて…ついてないわ」

「ははは、まあそう言わず頑張ってくれたまえ。明日にでも食事に連れてってあげるよ」

「分かりました。ところでカンダダ先生、マイケルさんだけがアリバイがないんでしょう？ だったらマイケルさんで決まりじゃないの？」
「ビアンカ、それは違うな」

「どうして？」

「マイケルさんはステイブさんが殺された時間帯、友人と電話をしていたんだ。さっきその友人に確認も取れた。ステイブさんは首を絞められて殺されている。電話しながら首を絞めるのも無理だ」

「そうですか」

「そしてスミスさん。彼にはバーで一人で飲んでいたというアリバイがある」

「けど、一人ならアリバイは成立しないわ」

「スミスさんは領収書を持っていた。バーのマスターもスミスさんを覚えていた」

「なるほど…。じゃあアランさんは？」

「アランさんは部屋でテレビを見ていたらしい」

「そんなの…アリバイになるの？」

「確かにアリバイとしては不十分だ。しかし…アランさん、袖をまくってくださいませんか？」

「ええ」

アランが袖をまくと腕に包帯を巻いていた。

「ステイブさんが殺された日の前日、アランさんは仕事で腕を骨折してしまった。これでは絞殺はとても無理だ」

「そうですか…」

「そうになると…怪しいのはクリスさん、あなたです」

「ちよ、ちよっと何で私が…」

「あなたはステイブさんが殺された時間、一人でドライブしていたらしいですね？」

「そうよ」

「しかし決定的な目撃証言がないんです。ほんとにドライブしていたんですか？」

「…」

クリスの顔がくもった。もしや…？

「分かったわ。言っわよ。私は確かに一人でドライブしていた。そ

してその時間帯は3ブロック先の通りを走っていた」

「証拠は？」

「車を…タクシーにぶつけちゃったのよ。逃げちゃったけど…。タクシー会社に聞けば分かるはずよ」

カンダダはタクシー会社に問い合わせていた。確かにその時間帯、何者かに当て逃げされたらしい。クリスの車にはぶつけた形跡があり、これでクリスのアリバイも完璧になった。と言ってもクリスは後で罰金を払うことになるのだが…。

「先生、どうします？」

「そうだな。結論から言うと…事件は解決している」

「え？」

全員、驚いていた。

「ど、どういことですか？この4人の中にアリバイの不完全な人がいるんですか？」

「そうじゃない」

「！？」

「犯人は…君だよビアンカ」

「！？」

全員、さらに驚いていた。

「な、何を言ってるんです？先生…」

「とぼけても無駄だ。ビアンカ」

「そ、そんな…。それに私はその時間帯は先生の書斎で本の整理をしていました」

「証拠は？」

「しよ、証拠？」

「私は出掛けていて君と一緒にじゃなかったし、君は一人だったんだよね？」

「そ、そうですけど…第一、動機がありません」

「動機ならある」

「…！？」

ビアンカは少し焦っていた。

「実は殺されたステイブはちょっとした知り合いでね。君は最近まで彼と付き合っていたそうじゃないか？」

「はっ？」

「そして数日前に突然捨てられた。それで逆上して殺したんじゃないのか？」

「ちょ、ちょっと待ってください。私はステイブさんとは面識すらありません」

「彼に少し相談を受けていたんだ。君に殺されるかもしれないってそんな…何かの間違いです！」

「ビアンカ…正直に言うんだ」

「私はステイブさんと付き合ってたんじゃないません！だから殺してなんかいません！本当です！信じてください！」

「…」

沈黙が続いた。しかしその時、

「ハッピーバースデー！ビアンカ！」

”パンッ”

クラッカーの音と共に、なんと死んだはずのステイブが現れた。

「！？」

ビアンカは驚いていた。しかしカンダダと容疑者4人は驚いていなかった。

「…」

ビアンカは目を見開いていた。口は半開き。

「ははは、すまない、ビアンカ。今日は君の誕生日だろ？サプライズさ、なあみんな」

「おう」

「ええ、そうよ」

皆は笑顔だった。

「…」

ビアンカは沈黙していた。

「ビアンカ、ビアンカ…」

「…」

「ビ…」

”ドサッ”

ビアンカは倒れた。

「ビ…アンカ…？」

カンダダはビアンカの心臓を調べた。

「し、死んでる…」

「！…」

その後。

『今朝、未明、男女の死体が見つかりました。男性の名はスティーブ・ロバーツ、33歳。女性の名は、ビアンカ・パーカー、30歳。周辺住民によりますと、二人はかつて恋愛関係にあり、たびたび喧嘩をしている所が目撃されており、そのもつれから今回のような悲劇に発展したと思われます』

マイケル、スミス、アラン、クリスがスティーブに恨みを抱いていたことは事実である。

カンダダと4人は口裏を合わせ、完全犯罪を成し遂げた。

皆さん、

くれぐれもサプライズはほどほどに…。

・・・おしまい・・・

(後書き)

ありがとうございましたあ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4935v/>

名探偵カンダダ二世（ショートストーリー）

2011年8月5日03時28分発行